



島嶼研究・関西西部会報告(9)その3（一九八五年四月二十日）ラスタファリ運動の多様性について

長嶋, 佳子
柴田, 佳子

(Citation)

太平洋学会学会誌, 29:79-102

(Issue Date)

1986-01

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001832>



島嶼研究・関西部会報告(9) その3

(一九八五年四月二十日)

ラスタファリ運動の多様性について

東京大学大学院 長 嶋 佳 子

(注記)

初めに多くのスライド紹介をし、残りの少ない時間で、用意した原稿やメモを顧みる余裕もなく、急遽、アドリブで話することになった。そのため本報告ではテープに基づいて不足を補いながら加筆修正してあることを、御了承願いたい。大幅な加筆部分は「」内に入れてあるが、スライド説明等で触れてある部分も多い。

はじめに

ラスタファリズム(Rastafarism)ないしラスタファリ運動(Rastafarian Movement)(注一)と一般的に呼ばれているものについて、基本的な点は五来氏が概略されたので、ここでは重複しないように補足し、また特に多様性に焦点を当てて話をし、あとは質問があればそれに答えることにしたい。

★ ★ ★

複雑性——多様性への序

ラスタファリ運動は初期の段階に比

べ、現代ではかなり位相も異なってきた、その相異点は顕著である。そもそもラスタファリアンとは誰か、何かという問いになかなか答えられにくくなっている。あらゆる文献を可能な限り当たって、細かい点まで調べ、また現地でインタビューをする等して調査すればする程、わからなくなってくる部分が出てきた。

多くの人が彼らの信仰(宗教)、政治、文化の問題等を通して様々なことを述べてきたが、実際ラスタファリアン(略称ラスタ、以下ラスタとする)の中にも実に様々な人がいる。その多様な姿、運動の多様性をどのように考

えたらよいのだろうか。

またラスタファリ運動は続いていくのか。存在しなくなるのか。あるグループだけ存続していくのか。カーゴ・カルトのような道筋を辿るのか。ジャマイカのみならず他のカリブ海諸社会、イギリス、アメリカ、カナダ等で西インドよりの移民が大勢居住する大都市にも広がりつつあるが、その衰えを知らない運動状況を、共に考えたい。

ラスタファリアンとは

まず特徴として挙げられるのは、他の宗教集団やカルトの信者とも明らか

に違ふ外見をし、それで大方分かること
 といふことである。ドレッドロックス(dread-
 locks)が多い。ある者は髭も伸ばす。
 服装も色のシンボリズムを巧みに使い、
 赤、緑、黄、白、黒を組み合わせる。

それらの色の被り物をしてドレッドロ
 ックスを包む。ラスタ・カラーのベル
 トをつける。ハイレ・セラシエ、アフ
 リカ大陸、ガーヴェイの絵入りバッヂ、
 あるいはラスタファライ(RASTAFARI)、
 エチオピア、アフリカ、セラシエー、
 ルーツ等々と書かれたバッヂをつけ
 る……。このような人々がよく見られ
 るのでラスタだと分かる、というのが
 通説である。これは一面では正しいが、
 それだけでは全体が把握ににくい。

ラスタになるといふことは、いわゆ
 るキリスト教等に見られるような「改
 宗」ではなく、ラスタファリとして生
 まれてくる、生前よりずっとラスタで、
 それに気付くのがいつの時点なのか、
 という発想のしかたをする。コンヴァ
 ージョン(conversion)という形で聞
 くよりライゼーション(realization)、
 つまり内なるものに目覚めてラスタだ
 ったのだと悟るといふ(注2)。ただし
 「改宗」と同一視する者も若干いる。

ドレッドロックスの有無

ドレッドロックスや髭を生やすのは
 信仰に基づいた掟ないし理想とされ、

何人もそのエキセントリックな容貌を
 して自らのアイデンティティを表明し
 てきた。しかしラスタ||ドレッドロッ
 クス、ないしその逆も真なり、という
 単純な構図は描けなくなってきた。一
 普通のノン・ラスタと変わらない者も
 あり、その数は増加中である。

これまでも新聞紙上等を騒がした
 ように、警察や軍隊等の予告無しに乱
 入や手入れ、衝突なども、まずドレ
 ックスあるいはラスタというだけ
 の理由だった。ラスタといえばむやみ
 に警官に殴られたり、投獄されたこと
 がよくあった。またドレッドロック
 スも見つけられたら勝手に切られる、な
 いしは剃られてしまうことがあった。

それで、せっかく大切に信仰の証と
 して伸ばしてきたのに何だ、とタム
 (Tambu)をかぶるようになった。ター
 バンのように頭を布で巻く者たちもい
 る。外見ゆえにそのような迫害や暴力
 を伴う敵意、排斥の対象になるのなら、
 毛を伸ばさなくても、内面はラスタな
 のだからよいではないかと考えるよう
 にもなってきた。ただ全体のラスタの
 急増に比べると、さほどロックス無し
 のラスタ(bald-headと呼ばれる)
 は急速に増えているわけではないよう
 に思われる。

毛糸の大きな帽子タムをかぶるラス
 タを見て、またべっとりくっついたま
 ま無造作に伸ばしてあるロックスを見

て、むれて臭く、汚いのではないかと
 思う者も多い。暑い国で、その暑さや
 むさ苦しさなどを気にしないのかもし
 れない。しかし快適さ、手入れの手間、
 清潔・衛生面を考え、毛を刈る人が一
 方ではいる。しかし最大の理由はラス
 タを止めるか、安定したまともな職を
 得たいからというものである。

「平和と愛」と犯罪者

ラスタは「愛と平和」(peace and
 love)をモットーにしそれを説くこと
 で有名で、非暴力主義である。真のラ
 スタは窃盗、傷害、殺人を犯すような
 ことはしない。神の掟にそむくことに
 なるからだ。それにもかかわらず、犯
 罪者のレッテルを貼られることがよく
 あったし、今でもそうである。犯罪者
 の方がラスタに(外見上)なって自己
 を隠す。つまりラスタの格好をしてい
 れば犯罪を犯さないだろうという想定
 のもとに、犯罪者が偽装するというこ
 とがある。

〔特にガンジャ(ganja)と呼ばれる
 非合法のマリファナの栽培、売買、喫
 煙を聖化し常用しているため、その取
 締りの対象になってきた。喫煙のため
 の暴力・犯罪行為の悪化、増加も問題
 にされてきた。真のラスタにとっては
 全く迷惑なことであり、ラスタ||犯罪
 者という社会的ステイグマの付いたレ

ッテルに抗議の姿勢を崩さない。しか
 し一般市民の強固なステレオタイプは
 そう簡単には崩れないのが現状ではあ
 る〕

信仰の動機としての

ヴィジョンや夢

信仰について最も問題となるのは、
 やはり自己の魂のあり方である。それ
 に基づき個人的、集合的儀礼を行うも
 のとされている。

宗教としての入信動機を聞くと、ヴ
 イジョン(vision)を見たとか、夢の中
 でセラシエ帝が現れて語りかけた、と
 証する者が少なくない。これは、アフ
 ロ・アメリカの民俗宗教的伝統の一部
 と考えて妥当だと思われる。キリスト
 教史の中でもヴィジョンは様々に語ら
 れるが、アフロ・キリスト教の一部で
 は、ヴィジョンや夢のお告げとかが無
 いとその宗教集団に加入できないとさ
 え言われる程、それらは重要な位置を
 占めている。ラスタもその意味では同
 類項である。

パラドックス

もう一つアフロ・アメリカの土着主
 義的キリスト教では、スピリット・ポ
 セッション(spirit possession、聖霊憑
 依)が見られる。しかしラスタはそれ

を拒絶する。また呪術・邪術の一種オビオベア、や幽霊、死霊ダブイ (duppy) とかの存在は信じないと主張する。

つまりアフリカの文化遺産を拒否している。「ジャマイカではアフリカ、ヨーロッパそして若干のアジア（インド、中国）の文化遺産がミックスされているが、アフリカの伝統の強さはよく知られている方である。ただし、白人文化等と混合され、しかも白人支配を根深く受けざるを得なかった歴史を持つため、アフリカ文化はある時には抹殺され、また歪曲され、圧迫されるなどして、不当な評価を受け、蔑視、劣悪視されてきた。それはジャマイカの黒人や黒人と白人との混血ムラト (Métis Latto) 層にとっては自らのアイデンティティの混乱、否定にさえつながったのである」。

ラスタが否定、拒絶する「アフリカ」は、まさに祖先より継承されてきた伝統である。そして他方で「アフリカ人」と自己規定し、「アフリカ文化の継承者」を自認する、というパラドックスが見られるのである。

ラスタの共通項の減少

初期の信条やドグマは、現代のラスタとインタビューしてみると、その共通項が減少してきている。以前は多くの共通項目が挙げられたが、最も重要

視されたセラシエ帝の神性についても、近年では全員の一致を見ることはできない。皇帝の死後、彼はもはや神ではないのではないかと疑問視する意見も当然出され、信仰を捨てた者も多く存在した。

神の不死に関連して、信者も不死の衣を着る、再生する、と聖書で約束された考え方も強い。しかしほとんどのラスタが若者ゆえ、自己の死についてはまだ深刻に考えているようには思われない。老人のラスタが死んだらどう解釈するのか、という興味深い疑問点もある。今までに交通事故死もあったし、ボブ・マーレイのように病氣(癌)による死もある。彼らの中には自己の中に神を見るところという表現をする者もあるが、肉体の死による不死や再生の説明はきわめて面白い。

「神」概念の多様化

また神格化の問題にしても、必ずしもセラシエだけでなく、他にも「神」を認めようとする傾向も出てきた。何を神とするか、神とは何かという「神」概念の変化である。

〔例えばセラシエ帝は神そのものでなく、唯一絶対の創造主、神により遣わされた偉大な王、アフリカの統率者として、人間性を強調し、神性を否定する。無論、セラシエこそ唯一の救世

主、聖なる神と主張し、彼の死を認知しようとする者も多い。あるコミュニケーションのグループ・リーダー、例えばピナクル (Pinnacle) のハウエル (Howell)、ブル・ベイ (Bull Bay) のプリンス・エマニエル (Prince Emmanuel) のように、老齢化した (ハウエルはすでに故人) カリスマ的人物を神格化する傾向も内部で見られた。これはリーダー自ら神性を暗示しつつ説いたことにも依る〕

文化運動として

ラスタファリズムは、宗教的イデオロギーに根差した文化運動としても把握できる。この文化運動を広く捉えて、アフリカの伝統 (ジャマイカ内、カリブ海ないし新世界の諸社会内の黒人文化的要素、ひいてはアフリカ大陸の伝統的文化を含む) を再度活性化すること、してきたものと評価できる。政治的、経済的、社会的、(狭義の) 文化的と各分野別に明確な主義主張あるいはモットーによって、ジャマイカの中のアフリカ化を図ってきた、活性化してきたところがある。

〔例えば政治的には民主主義的社会主義ないしは前マンレイ (Michael Manley) 政権 (Peoples' National Party) の標榜した社会民主主義 (Social Democracy) に近い平等原理を信奉する

が、政体としては神政政治 (Theocracy, Theocratic Government) を理想とする。現実の政治の動向には敏感であるが、抗議の一環としてコミットしない。特に選挙では参政権があっても棄権し、冷笑する。

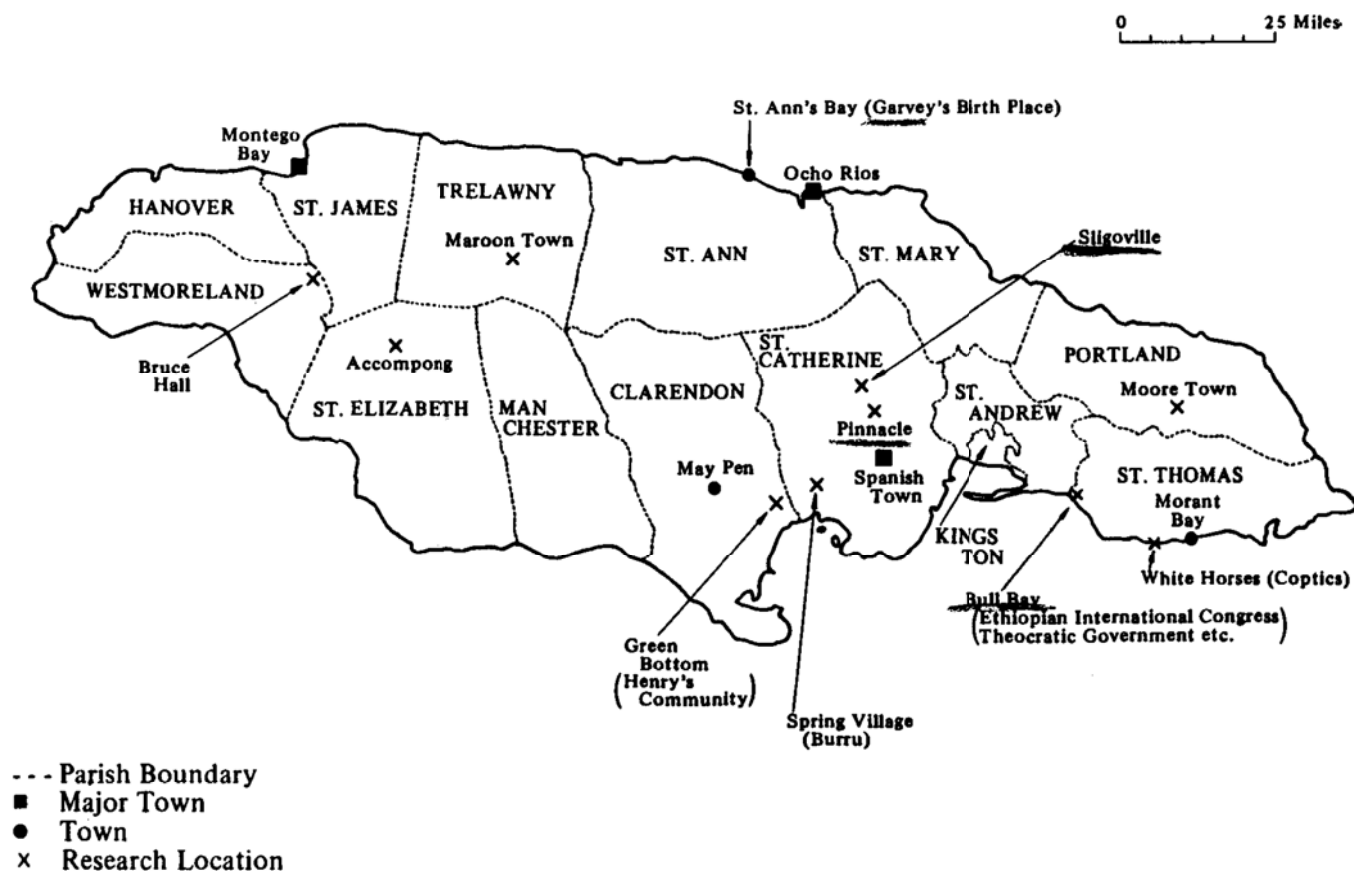
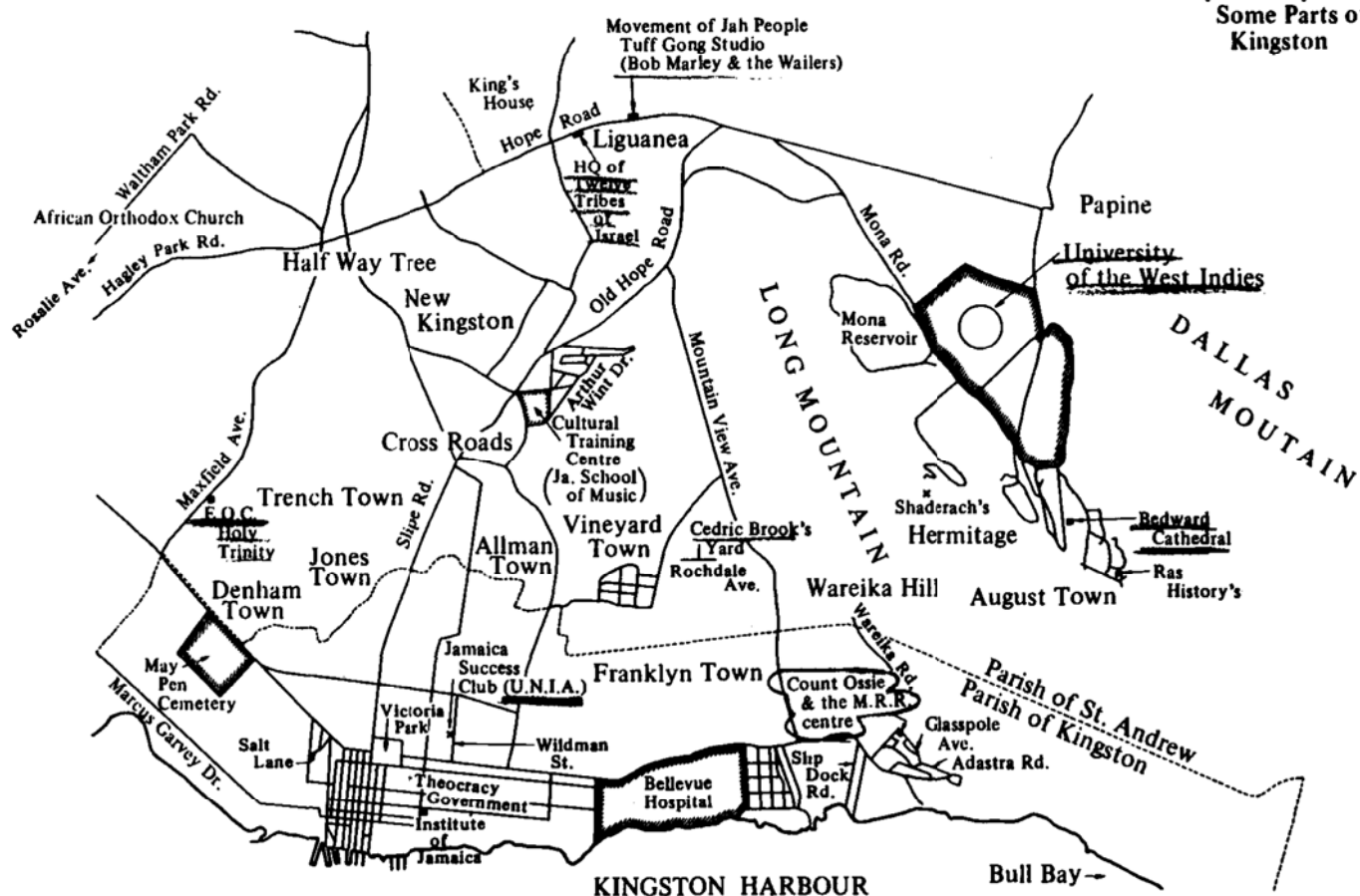
経済的には自給自足を基本原理とし、不必要な土地の乱用、自然の産物・資源の乱獲に反対する。人工的なものの介入を忌避し、機械類も拒否するか必要最低限度に止める方針を採用する。主に小規模な農漁業や自然界の産物を利用しての手工芸、そして最も得意とされる芸術活動に従事する。余剰があれば仲間 (理想的には) 平等にないし必要に応じて分配し、相互扶助の原理に立つ。

社会的にも多種の主義、モットーがあるが、人間関係の基礎は「愛」に基づく信頼関係で成立し、特にラスタ仲間同士は「兄弟」「姉妹」となり、そのように呼び合う。「愛と平和」を維持するため、できる限り相互交流を持続し、相互扶助のネットワークが常に機能するよう図らう。話し合い、談合、議論もそれらに役立つ。

また家族は最も重要な単位である。

現実には困難の方が大きい、家族形態、それも大家族が理想とされる。無論ラスタ同士の夫婦が最も望ましいが、女性のラスタの少なさが問題となっている。ノン・ラスタの女性と関係を持

[MAP I] JAMAICA: Parishes and Research Locations

[MAP II]
Some Parts of
Kingston

ち同棲しているうちに、彼女がラスタとなる例も少なくない。子供を産み増やすことは神に奨励されていると（聖書より）解釈され、家族計画や避妊を忌避する。

家族の長は父親で、最高の権威者とされる。妻は夫に、子供は両親に従順でなければならず、そうして家族内の秩序は保たれると信じられる。夫婦は同信の者同士でないと、考え方や生活様式の相違が大きくなり過ぎて葛藤が頻繁に起こることになる。子供の教育もラスタの信条や主義に則ったものであるべきで、ラスタ専用の学校を設置し（実際にそのような動きはあった）、教師も当然同信の者とする（注3）。

食事は自然食（イタル・フードで、人工的なもの（缶詰、ビン詰類）、加工品、化学物質の混入をタブー視する。旧約聖書の聖句の解釈により、肉食（特に豚肉）はしない。魚類は鱗の無い小さなもの（一説には12インチ未満）のみ食用にできる。大部分の蛋白源は豆類（beans, peas）である。完全な菜食主義者もいる。塩も忌避して使用しない。スパイスは多種類用される。アルコール類も忌避する者は多い。ガンジャは常用する。

組織化の動きは当初よりあり、規模の大小はあるが、多数の象徴的名前をつけた集団に属するなり交渉を持つ者が多い。一方では組織化は諸悪の根源と

見て、独立独歩の者もいる。集団活動は不定期、定期的とあるが、同信の者が神の名の下に集まり祈るのは聖書より是とされていると主張する。

文化的には、芸術は神からの恩恵で、各人に与えられている天性の素質を磨くことは一種の使命と考えられている。音楽、絵画、彫刻、装身具制作、手工芸品等々の多くの分野でユニークな創作活動、ないし彼らを補助する関連分野で活躍している。文筆活動も詩をはじめ短編等を残し、特に詩は朗読ないしリズムカルな音楽に合わせてうたい踊って演じる。ジャーナリズムや学界で活躍する者もいる。舞踊に秀れた才能を発揮する者もいる。洋裁や刺しゅう、染色（バティック等）を手がける者もいる（女性がが多い）。

その他列挙すれば際限なく広がる

再解釈の断続

ラスタファリズムは前述のように、当初の幾つかの共通性が、年代を経るにつれ狭まりつつある過程にある。例えば復讐の概念ナイヤビンギ（Nyabingi）（注4）は、「白人抑圧者よ死ぬ」を意味したが、その戦闘性は減少している。また政治的意味の強い信条からも、片寄った政治性は欠落してきている。神観念も然り。そしてラスタファリズム自体も、ある教典、聖典

に則り、体系化された神学があるわけでもない。定義自体が不可能なのである。ラスタ自らが様々な価値を付与し続け、自らの信じる「アフリカの再建」を大切にしながら、結局個人的再解釈が蓄積できた。それがある集団組織内に定着させようと試みてきたのである。そしてそれが運動の支持母体と云えるのである。

「エチオピア」「アフリカ」に対するアンビヴァレンス

彼らのエチオピアの概念はユニークである。現代ジャマイカ人でも、歴史的エチオピア、ないし実情に精通する者は少ない。ラスタの中にはよく知らないで、エデンの園と同一視したり、

黒人文明が進んでいる（「ガーヴェイは古代アフリカ文明の高さを唱道賛美し、当時のヨーロッパの「野蛮さ」と比較し、黒人に誇りと自覚を促そうとした」といった漠然としたイメージを描いている。一方で昨今の飢餓の情報が報道されている。その受容、解釈の仕方は一様でない。

またエチオピア正統教会はジャマイカにも70年より設置されたが、エチオピアの同教会の伝統やキリスト教の長い歴史、コプト教会などに関して理解している者は少ない。

直接のルーツである西アフリカ文化

についてもほとんど知らない程である。一方では「アフリカ」を称賛しつつも、部族（tribe）個々の次元に話題を向けると、「あいつらは原始的（primitive）で遅れている（backward）」といった、対立ないしアンビヴァレント（ambivalent）な概念で説明し始める。

これまでは学校教育でアフリカについて学習する機会はなく（植民地主義の弊害）、ヨーロッパ白人文化至上主義が支配していたが、近年教育制度や内容も改善されつつある。また彼らの旺盛な知識欲は、徐々に知の質を向上させ、さらに賢明に知の枠組を変え、そしてラスタファリ運動を新たに推進してゆく力、可能性に結びつくのではないだろうか。

パースペクティブの変換(1)

— 初期のグリーンナー紙

では、彼らの、また我々の認識はどうであろうか。従来のように、メシアニズムの一部として考えるのか。あるいは千年王国運動の一部として位置づけるのか。終末論的側面もまだある。あるいは預言者運動なのか。土着主義さらに活性化運動……等々の学術用語で述べられてきた側面が一方ではある。

当初は、奇妙な人たちが表れた、セラシエ帝を神と呼ぶ人たちがいるそう

だ、といった形でまず新聞で取り上げられたのが、いわゆる報告（若干の調査を含めて）の最初であった。このデイリー・グリーナー紙（The Daily Gleaner）は一八三四年に発刊されて以来の古い歴史を持つが、いわゆるミドル・クラスに支持されてきた。この一大有力新聞が体制と結びついている側面は見逃せない。報道内容、情報は彼らの意見や認識である。彼らの大多数は正統派キリスト教に属するか、それを背景に育ってきている。彼らから見ると、聖書を使い（逆手にとり）、イエスキリスト以外に神を認める、しかもエチオピア皇帝を神とするなどということは理解を越え、不遜なものと解釈された。

当時はムラトや下層階級の黒人、ないし「アフリカン」、「ニグロ」と呼ばれる人々に対する正当な認識は無く、軽蔑、差別の対象であった。底辺から生まれ出た極めてエキセントリックなものとラスタは映ったのである。そして髪を異様に伸ばし、ドラムを叩くのは、いかがわしさの象徴であった。

パースペクティヴの変換(2)

— 大学報告

50年代に入ってから初めて、研究者、学者の真面目な考察対象となり、発表され始めた。代表的なものは被抑圧者の

抵抗運動という見方で、シンプソン（G.E. Simpson）らによって提出された。

60年代に入ると間もなく、有名な大学（西インド大学モナ校 Univ. of the West Indies, Mona）報告（通称 University Report）が出された。それまでラスタファリズムは理解し難く、奇異で不快感、恐怖感を市民に与えてきた。また警察等との衝突が盛んで、極めて暴力的なイメージも与えてきた。その宗教観や歴史観の「魔的」曲解性なども一因して「サタンの仕業」という偏見やステレオタイプが定着しつつあった。合言葉である「ナイヤビンギ」を頻発した。

しかし「真のラスタ」が求めていたのは、ジャマイカという「バビロン」にいても地獄同様だ、自らのルーツであるアフリカ、「エチオピア」に帰りたい、帰らねばならない。奴隷として強制的に連れて来られたのだから、今度は政府がタックス（税金）で送り返してくるのが当然である云々……。自分たちにますます付着する汚辱を払拭しよう、また何とか正当な評価がなされるように調査して欲しい、と数人のリーダーが大学に直訴、懇願したのである。

大学側も事態を重く見て彼らの緊急要請を考慮し、急いで対応した。二週間程でインテンシヴな調査をし、出来

上がったのが大学報告であった。ところが、調査者（オージェ、ネトルフォード、スミス R. Angier, R. Nettleford, M.G. Smith）は、ラスタに好意的になり、提出された報告書の内容は、中産階級の反感を買ってしまった。

特にリパトリエーション（repatriation）の問題では、アフリカ帰還をタックスで実現させることを是とする方向性を打ち出す旨も公表（大学報告の結果はまずグリーナー紙に掲載された）されるや、新聞紙上はその是非をめぐり、喧々囂々の議論が沸騰したのである。何故ジャマイカ国民であることを否定する者たち（ラスタはジャマイカをバビロンとみなし、自らをエチオピア人、アフリカ人と主張する）に、我々ジャマイカ国民の税金を使わなくてはならないのか、という意見が大勢を占め、同情論は僅少であった。ラスタと世論の激しい動きは、60年代を賑わせたと言える。

パースペクティヴの変換(3)

60年代の一大出来事——ラスタ、生き神と見ゆ

60年代の前半も、ラスタは社会問題化され続け、ステイグマは増加の途を辿った。しかし他方では、徐々にではあるが、一般大衆の間にラスタへの理解も広まりつつあった。またラスタの方も、むやみに敵意を抱かせない

ように前進する方が賢明と、闘争心を稀薄化していった。つまり双方の意識変化は歩み寄りの姿勢をとらせ、それは双方にとり（特にラスタにとっても）益のあることであった。

60年代は実に様々な出来事が数多く起きた。血生臭い、また焦臭い事件も続出した。しかし、なかでもセラシエ帝のジャマイカ訪問は、特筆に値する。ラスタはついに生き神を見たのである。ところが、彼らが見た黒人の神は、ニグロ系とは明らかに違うセム系の顔立ちをした、小柄な男であった。その外見に失意落胆し、彼の神性を否定し、信仰を離れた者も多かったようである。

しかし彼が空港に降り立った日の様々な「奇跡」（降っていた雨が彼の到着時にはすっかり止み、天候も彼の出現を「祝福」したこと、当日予定されていた国家の重臣の歓迎祝賀会にラスタも参加できたことなど）や、彼の「慈悲深さ」を証明するかのような彼の姿や態度（例えば、徹夜組も含めて、遠来からも、空港に入りきれない程大勢のラスタがひしめき合っただけで彼を出迎えたのを見て、感激して涙をこぼしたなど）を見て、感激し、さらに信仰が強まった者は数多かった。66年の出来事だったが、これを契機に運動はまた新たな展開を見せることになった。感動は口伝えされ、噂は噂を呼び、誇張さえされて波及していったのである。

パースペクティブの変換(4)

60年代後半から70年代へ——レゲエ、推進母体となる

60年代末は非常に政治的意識が高まった時であった。それはさらに70年代に結びつき、発展していった。

70年代への展開で最も強い推進力となったのが音楽である。ラスタファリズムはポップミュージックと結びついてレゲエを生み、そのレゲエが母体となって急速に広まっていった。レゲエには、抑圧された、言葉にならないもの、喜怒哀楽などが巧みに表現されている。そこにはアーティストたちの賛同があり、磨かれた感性と一体になった。リズムやメロディーや歌詞内容さえも、中産階級ないし上層階級にも受容され、楽しめるような状況が出てきたのである。

72年、76年には国家を二分した程の総選挙があり、ラスタも政治的に介入した。(この時もラスタを動員するため、ラスタのキーワードを使った歌詞を盛り込んだ選挙用のテーマソング、キリスト教的シンボリズムをふんだんに用いたスローガンやキャンペーン合戦が繰り広げられたのである)

しかし、これらの選挙への介入後、彼らが真に悟ったことは、政治家の懐柔策に乗せられ、使われただけだったということであった。以降、政治その

ものに対する不信感はいや増した。そしてむしろ社会的、文化的な面で貢献し、社会的適応の度合をますます強めていったのである。

80年代以降の動向

80年以降(筆者は78年10月〜80年7月までジャマイカに滞在)、どのような展開を辿って来ているのか、またこれから辿るのか。今夏、再度調査に行くが、宗教的な側面や政治的なものは部分的にせよ弱まっていく傾向が見られるのではないかと思われる。

政治については、これまでの介入、コミットメントのために裏切られたという苦々しい感情が根強く残っている。二の舞いは踏みたくないであろう。一切不干渉か、ないしは非常に(彼らにとって)妥当な、生活の振興を図る制度、政策なら、PNP(人民国家党、現野党)、JLP(ジャマイカ労働党、現与党)、どちらでもよいという立場もありうる。そうすると、ラスタファリ独自の対応の仕方は徐々に消えていく可能性がある。つまり彼ら独自の政治観に基づいた意思決定が、運動体としては薄れてゆくかもしれない。

ただし何人かの研究者、学者が指摘しているが、ある面ではラスタファリの思想とは離れても政治的には非常に

強くなり、労働組合や政治団体との関係や結合を深めようとする者たちも存在する。彼らのような活動家はいわゆる「左派」と手を結ぶわけではなく、時機に応じた対応策を練っているといえる。また一方では、政治に全く介入しない者が多く存在し、それこそ真のラスタと断言さえする。彼らのほとんどは文化的メディアだけで、芸術等の表現を使ってそこからラスタの思想やアフリカの血を持つ黒人たちの心情を十分に汲み取った、黒人意識を主張するのである。

「ラスタ」にこだわらないラスタ

自称ラスタの中には、ただ黒人の地位向上というだけではなく、それまでつきまとっていたステイグマが次々と払い落とせるような方向性を打ち出せるのなら、特にラスタにはこだわらない、という者も増えている。しかし、外見はラスタを装い、象徴的な身の回り品をつけ、アイタル言語を繰る。つまり、ラスタ的でありながらそうではない者も、またラスタに見えなくても実はラスタという者も多勢いて、その内実は複雑である。この複雑性は多様性につながり、近年その度合は強まってきたのである。

これらの動向は70年代後半より明らかになってきたようで、今後も増える

と思われる。ラスタファリ運動は大学生やインテリの中にも浸透していったが、彼らの中にも外見上の特徴は見られないが思想的にはかなりラスタに近く、ラディカルなものを持つ傾向がある。その「ラディカルなもの」というのは、政治意識が強くなったり、あるいは組合運動や党活動などに直接間接に介入するということではない。無条件生活体系などに相違はあるが、基本的には、持って生まれたものは同じだということのような、むしろヒューマニズムに則した平等主義的人間観のものを見ることを意味する。「同じもの」という基盤の強調は、例えばアフロ・アメリカの伝統であるかもしれないし、キリスト教の伝統であるかもしれない。

多様性の生まれる理由

——組織とリーダー

どうしてこのような多様性が生まれるのだろうか。

まず運動体の組織面を見ると、一人のリーダーが組織を統一化するのは

ない。このような組織形態が見られるのはむしろ特殊なグループである。一般的にトップ・リーダーは神のみという大前提がある。プリンス・エマニュエルのように、半擬人化された神的存在を除き、ほとんどリーダー格の者も一般信者と同等のレベルとして扱われ、思考の視点もそうである。ただし、様々に与えられる役職や地位、権威などによっては、一種のヒエラルキーも見られる。

比較的大きな組織となっている十二氏族 (Twelve Tribes of Israel) は、かなり意図的に組織化を進めてきているが、多くのグループは「組織」(organization) という言葉・概念さえも嫌う傾向がある。それはこの言葉にまわりつく「植民地主義的」、あるいは「帝国主義的」ニュアンスを敏感に嗅ぎとるからでもある。

一種官僚主義的なもの、ないし経営面といった利害が先行し、しかもステイック (stick) なイメージを想定する。また一度組織体になると、なかなか柔軟な様式や思考も生まれにくいと考えている。このような反組織化傾向は、一方では多くの個別的な小グループを生み、相互に不干渉、没交渉的關係をとることはなるが、独自の歩みができ、それが多様性を生むことにつながると考えることはできるのである。

コミュニケーション体系

このような無頭型の (acephalous) 組織、つまり (強力な) リーダー無し の平等主義的集団形態と構造を持つて いるため、伝達系統も自然と多様になる。つまり内部で自由にコミュニケーションの入口と出口を見つけることができる。上から下へ直通型の伝達形態はあまり見られない。ただしある儀礼、それも教会の礼拝と類似したような比較的規模の大きい「礼拝」などでは、「説教師」と聴衆という構図があり、その伝達系統は前者から後者へと流れ、その逆方向は形態上、例外を除いてま ず無いと言ってよい。これらを除くと各自好きな方向に好きなように情報経 路をとることができる。また他方向か らも自由に情報内容を受け取ることが 可能なのである。

以上概略しただけでも、運動の多様 性を生み出してきた土壌が少しでも理 解されたかと思う。

運動自体は非常に柔軟であり、ユニークさを様々な形で打ち出すことに余 念がない。それは変化し続け (その可 変性も運動推進、ないし発展の重要な 要因であると同時に、重要な一側面 である)、思想・イデオロギーのレベル や、世界観、音楽面などにおいても、

基本的には神を神とし、そして神と人 とのコミュニケーションのあり方を模 索しているとも言えそうである。

矛盾の超克へ

ただ前述したように、自ら非難、批 判、軽蔑、拒否してきたアフロ・ジャ マイカの伝統的文化を結局は継承して いるという矛盾については、彼ら自身 も気づき始めている。

例えばクミナ (Kumina) と呼ばれ る最もアフリカの (シンクレティズム [Syncretism] の度合が少ない) なカル トがある。これはコンゴ系部族の祖 先崇拜を基盤とする宗教文化複合体で、 セント・トマス行政区 (キングストン 東部に隣接) 内の人々のものが主体と 言われている。クミナは無論ラスタフ アリズムより極てアフリカのであり、 脈々と伝えられている伝統である。

それまでこのような民俗文化には目 を向けず、「迷信」扱いしたり、「アフリカ」文化でないと「無知」をもさら け出してきたところがあった。しかし 知識量も増え、自らの眼も開かれ、他 方では外部者より (そして若干のラス タのインテリにより) 彼らの無知蒙昧 さを指摘されるなどして、従来通りの 自称「アフリカ文化の真の継承者、真 の提唱者」を繰り返すだけでは済まされ なくなってきたのである。

それをラスタはどのように正当化し てゆくのか。またどのように適応して ゆくのか。それらへの答は、ラスタが 生き残るための一つのキーである。ア ナクロニズムに向かうか、積極的な変 質を図る道を探るか、あるいは自己満 足的な「真理」、「アフリカ文化」の 「真の継承者」を自称しつつ、名実共にその道を歩むか、幾つかの選択肢が ある。

彼らはまたクミナだけではなく、オ ビアも、また自らが背景としたリヴァ イヴアル (Revival Zion Zion Revival) に代表される土着主義的キリスト教 (土 着バプテスト派 Native Baptism) の 伝統も拒否してきた。その同じ彼らが、 同じ聖書を用い、解釈を次々と加え変 更し、そして非キリスト教的文化等々 を随所に散りばめ、冷徹な眼で見ると 首尾一貫していない「ごた混ぜ」状態 のものを総称して、「真のキリスト教」、 ラスタファリズムの真性と主張してき た。これについても、彼ら自身で表現 のみならず思考の枠組も変換せざるを得 ない状況になってきたのである。

「アフリカ」文化の正当化

音楽ないし音の世界に限ってみても、 彼らの儀礼的ナイヤビンギ音楽こそが (ある者は当然レゲエこそが、と主張 するが)、アフリカのルーツである、な

いしは聖書で示されている真に神聖な音楽であると主張してきた。しかしアフリカ大陸の、特に直接のルーツである西アフリカ、サハラ以南のブラック・アフリカの豊かな伝統と比較すると、やはり粗野で単純な音やリズム、楽器それらにまつわるシンボリズムといった側面は否定できない。彼らはこれらについて今後どのような説明をし、また音楽を変えてゆくのだろうか。あるいは持続・保存させるのだろうか。

舞踊については、ジャマイカの他のカルトをみても、非常にリズムカルで動きの激しいもの、セックス・アピールの強い（特に膝上から腰にかけて）動きが盛んに出てくる。一般にはこれらを一方的に伝統の残存と解釈している。一方ラスタの踊り（特にナイヤビンギ儀礼での）は、これらに比べて動きが少ない。（彼らの中の数名の才能あるコリオグラファー兼ダンサー（choreographer/dancer）による集団舞踊、特にショーなどでの「見世物」は、ナイヤビンギで見られるような個人的で不定型で、比較的動きの激しくないものとはほとんど無関係と言える。それはネオ・アフリカンとでも呼べる、常に創造されてゆくものである）

これまでラスタは自らの儀礼時の舞踊（というより動き）を「アフリカ的」と主張してきたが、これをどのようにしてゆくのであろうか。新しい舞踊形

式を生み出し、一種の定型化過程を経て、それをラスタ独自のものとしてゆくのか。自己に流れる「アフリカの血」、長年培われてきたアフロ・ジャマイカの音や動き、そして国外よりの影響：これらを基礎に創造されたものを定着化させ、それを「作り出された伝統」としてきたと考えられる。

アフロ・ジャマイカの伝統の再解釈と再定義は、彼らの今後の展開にとり重要な一課題である。それはまた、彼らがこれまで多様に変更をしてきたものをいかに維持してゆくか、という課題にもつながるのである。

アイタル (Ital, Ital) 言語 (注6)

ラスタファリアンは、一般のジャマイカ人では理解不可能なユニークな言葉を創り出してきた。単語やシンタックス (syntaxes) 等に特に見られるが、一大特徴は、「I」という単語を非常に多くしかも強調して使用することである。普通の英語で一人称単数を示す「私」で、「アイ」と発音する最も基本的な単語である。

しかし彼らの概念では「私」はIではなく、「アイアンナイ」、「私と私」、I-n-I (I-an-I) (注7) となる。そして二人称の単数・複数形も同様に「アイアンナイ」(アルファベット表記も区別なし) となる。そして三人称「彼ら」、英語の they (ただしジャマイカ

ン・クリオール、パトワ [patois] では "dem", "dey" と表記されることが多い。パトワでは主格や所有格でも目的格をとる傾向が強い。黒人英語にある程度共通性が見られる) も同様である。

このように I-n-I を人称や単数・複数の区別無しに使用するが、それらのスイッチが彼らの中で、あるいは彼ら同士の間で自由自在に行われることになる。最初に誰が考案したのかは不明だが、その浸透度には驚くべきものがある。ラスタのみならず、特に若い世代の間にも流行し、アイタル言語を幾分かでも使用することがいわゆる流行に乗って「すすんで」いることの証ともなっているくらいである。また若者のみならず中高年層も、自分の言葉として頻繁に使用せずとも、簡単にポピュラーな言葉、例えば Ital, I-n-I くらいは理解している。

(ただしラスタが使用するのは I-n-I のみに限定されない。例えば自己を指す時 (一人称単数)、仲間意識を強く出す時 (一人称複数)、また相手がラスタの時 (二人称単数、複数)、第三者のラスタの特定個人、不特定多数のラスタ、ラスタ全体を指す場合など (三人称単数、複数)、「アイマン」(I-man)「ラスタ」、「ラスタマン」といった呼称は多用される。しかしながら、これら

は大部分が男性の話者によるものであり、女性のラスタでは例えば「アイマン」、「ラスタマン」は用いられず、「ミ・ラスタ」(me/mi Rasta) などに取り替わられる。たいていは I-n-I である。相互には前述のとおり「兄弟」「姉妹」(brother/sister), sisah(sister) の他、個有名詞の使用が圧倒的に多い。また多くの場合、第三者、例えば調査者などと話す場合、「配偶者」(「結婚」はしていないが "common-law" の関係に入っている場合) は夫を「王」King、妻を「女王」queen と呼び、一種の敬意を示す表現をとる)

ラスタの固有名詞については時間の制約上触れられない (資料に例示)。

(ラスタ同士、あるいは彼らとある程度知る者を混じえての会話では、彼らに敬意と愛着、信頼感を示す表現として、ラスタ特有の固有名詞も使用される。これらはラスタになった、あるいはラスタであること、つまりラスタとしてのアイデンティティの核の一つであり、極めて重視されるものである。例えば資料として黒板に掲げてある絵の作者はラス・ダニエル・ハートマン (na'ishアートマン) Ras Daniel Heatan (ジャマイカン・パトワでは頭文字の H の [h] 音は発音しない) であるし、先述の著名な長老格リーダーの一人はプリンス・エマニュエル Prince



会場での筆者

Emmanuel など Immanuel その他ラス何某やタファリ Tafari を始めかわりにつけたり、それこそ千差万別である)

アイタル言語の問題点 ないし難点

アイタル言語はその広がりにおいて際限なき可能性を持つ。人称代名詞、固有名詞のみならず、他の名詞、動詞、形容詞、副詞までその影響を受けている。例えば時間タイムは「アイワ」iwa、はつれん草に似た野菜カラー calaloo

は「アイラルー」'ilaloo、抑圧するオプレス (oppress) は「ダウンプレス」'downpress、理解する understand は「オーヴァースタン」'overstand' 等々と変換ないし新造されている。また、「アイ」の強調は、'i' そのものの頻用のみならず、[ai] という発音の強調をも意味する。

そこには一種のキー・コンセプトがあるが、新造語創造、シンタクス変換などに一定の法則が求められているわけではない。ある規則性は見られるが、例外も多いのである。ただ、未知の単語や表現が次々に生み出され、広まっ

てきたことは自明である。一般のジャマイカ人はお手上げだと、よく冗談めいて語ってくれた。ラスタ同士の会話、ましてはリーズニング reasoning の内容は不可解だとさえ言うのである。彼ら同士、仲間内の合言葉やユニークな概念の連続体の中に、論理やコンテキストの首尾一貫性が常にあるわけではなく、先述したような頻繁なスイッチのはざまにあり、第三者はえてしてコンテキストについてゆけず、逸脱させられてしまうことがしばしばある。無論、第三者を煙幕に巻くため、意図的にすることもある。

ここで問題にされるのが、ノン・ラスタとのコミュニケーション・ギャップである。彼ら自身のコミュニケーションは、一種秘儀めいたものを持つが、相互理解は可能であり、むしろその秘儀性ゆえ比較的深まるかもしれない。しかし、自己満足的な部分も大きい。一般市民など部外者との間の誤解はこれからも出てくるし、ラスタ自身の態度いかによっては増えるものである。特に儀礼時に顕在化する秘儀性ゆえにある。

一方ではノン・ラスタの人々に理解を執拗なくらいに求めながら、他方で溝を掘る作業は形を変えながらも様々な形で行われている現実を、彼らは本当に深刻に考えているのであろうか。正直なところ、彼らは「クレーマー」

であり、権利の主張においては非常にアグレッシヴ aggressive になるが、理解を求めるための思慮・戦略にはそれほど長けているとは思われない。これは自己矛盾の解決、突破への道づくりの課題の一部といえるであろう。

ユニークさの維持

儀礼 (の一部) としての討論、談合話し合いリーズニングは、誰が始めるともなく始まる。トピックや内容はラスタファリズム全体、より身近な自分たちの事はもとより、国内政治、経済の諸問題 (自らの問題につながるが)、国際政治 (特に超大国の動向、他のカリブ諸国情勢、そして極めて関心の高いアフリカ諸国内の内紛や人種問題、解放闘争等々、多くの「同胞」の問題をカバーする。無論、恋愛問題やそれを発展させた広義のセックス、家族観、子供、教育、食事、服装、ガンジャ等の重要課題には必ず意見を持つ。各テーマで展開されるユニークさは、これからどのように維持できるのだろうか。リーズニングは見解の一致を見ることを目的としたものではない。つまり多様な意見が出、それらはある程度尊重されている。「リーズニングないしナイヤビンギの場では雑多な外へ向かう遠心的な力、方向性・指向性がありながら、同じ場において調和、統一(均

一ではない)を図ろうとする求心的な力、収斂性も働いているのである」

集団化と個人化

さらに生活様式、特にコミュニティ形成についても、前述したように、多様化の一途を辿っている。一部ではハウエルやエマニュエル(プリンス)の所のようにコミュニティを作り、基本的に自給自足の生活をしている。しかし彼らの傾向は、場所的にもいわゆる人里離れ、部外者の容易な立入りを不可能ならしめるような所を選んできた。それもいわゆるスクォーティング squatting、不法占拠がほとんどである。コミュニティの規模はある程度大きいので、それだけの土地をまず切り拓いて一から作ってきた。それだけに内部の結束なり親密性是否が応にも高まる傾向は(「裏切り者」を除いて)あった。と同時に閉鎖的な傾向も出てきた。そしてその閉鎖性は、コミュニティ自体の発展性(量、質共に)をも疎外する一因ともなっている。

ハウエルのピナクルはたび重なる警察当局等の侵入破壊行為、検挙(逮捕)があり、ついにコミュニティからの退去命令、フォロアーたちの離散、ハウエルの死と、結局は最大のコミュニティは崩壊していった。

また一度集団化、特にコミュニティ化

すると他のラスタ集団とのコミュニケーションの持続の方法は、困難になってくる。内外よりの圧力がかかるというより、特定集団へ一度コミットすると、その世界で生きてゆこうとするこの方が多いようである。大まかな言葉で表現すると「忠誠心」に近いものかもしれない。究極的には神、セラシエと個人とのタテの関係こそが絶対で、ヨコのつながりは二次的なものではある。しかし現実には、「有名」なグループや組織体へ一度加入すると、そこでのコミットメントが要求されるのである。

名ばかりの小グループ、仲間が集合した時にのみはじめて集団性が出てくる。あるいは有名無実化したようなものでは、複数参加はほとんど常に可能である。「有名人」も基本的には個人主義的で、その場、目的等に依じてグループ・アイデンティティを表明するので、問題ないし葛藤はまず無く、超然とさえしている。ただごく普通のラスタは、一方では個人主義的立場を尊重し、そのような言動をとるが、他方ではグループ・アイデンティティにも強い関心を持つ。

ある者はグループ形成をトライバリズム tribalism の延長とみて警戒心を示し、「独立独歩派」ないし個人主義的傾向を強める。しかし、かといって自己中心的/排他的個人主義ではなく、

むしろ汎黒人観を持ち、達観したところがある。彼らは独自の明確な思想を持ち、言葉でそれらを巧みに表現する。高等教育を受け、より客観的な物の見方ができ、諸事情に精通している者も少なくない。

他方では、ラスタ同士のみならずより近隣の者たちとの交流、活動を共有できるようなコミュニティ・センターを建設したりする動きもあった。マスタート・ドラマーと称えられた故カウント・オシー Count Ossie が率いていたミスティック・レヴェレーション・オブ・ラスタファライ Mystic Revelation of Rastafari (略してミスティックス)という名のグループは、コミュニティ・センターをキングストン東南部のスラム地区に設立し、地域の文化・教育センターとしても機能してきた。「ベーシック・スクールや図書室も設け、近隣の子供たちの教育の場となっている。その他、芸術分野(音楽、舞踊、服飾品デザイン、製作等)でも人材の育成にあたってきた」

このように一見逆方向に各々が展開しようとしている動向を、ラスタはどう把握しているのだろうか。またどのように他の「兄弟姉妹」との接点を見つければ、共同作業を進めていこうとしているのだろうか。そして新しいものを創造していこうとしているのだろうか。これまでの歴史を見ると、共同の

創造活動の可能性は十分にある。その共同性の枠組をどの程度広げられるかが、一つの課題である。

「コー」再考――

自己と他者の認識(1)

利己主義的自己否定

彼らの自己認識について、「コー」を鍵としてその多様性を再び探ってみよう。一体なぜこのような表現を使用するのか。そしてしなければならないのか。これを一人称単数の「私」を意味するものとして考えてみると、「コー」は使わず「コー」とすると、結局元来の一人称性は否定されていると考えることは可能である。それはこの表現の複数性によるだけではない。先述の他の代替表現 Iman, Rastaman などでも、複数性を内包する表現と同等に並列できることも関連してくる。そこでは利己主義の個人主義的自己が否定されていると解釈できないだろうか。

彼らのイデオロギーの中には、多く利己主義(植民地主義、帝国主義の先鋒であったヨーロッパ白人を主に指すが)や集団の美徳を否定する個人主義への強い批判がある。それらを吟味すると、この「コー」は自己吹聴的態度の否定と解釈してよいであろう。筆者が個人的にインタビューを申し込んだ

際、あるいは二人だけで話をしていた時に気づいたが、彼らの中にはいわゆる「個人的」見解を表明するのに躊躇したり、あるいは言明を避けた者が多くいた。また「個人名」を伏すよう要求し、約束するとのこちらの返事を信じるまでは心を開かなかった者もいた。ある者は「ラスタ」としての見解と「個人的・私的」見解とを区別した。またある場合には、他のラスタと一緒にないと「ラスタ」のことは語れない、と個人的意見が個人化される危険性（可能性）を敏感に感じていることをうかがわせる場面もあった。

これらのことは傍証の手掛りとなると考えてよいのではないだろうか。つまり自己で他者（のラスタ）を代弁し、「我々」意識、兄弟姉妹愛、平等主義的人間観を示すものと解釈可能だと思われる。

自己と他者の認識(2)

自己否定の傲慢と他者否定について

しかしながらこの自己否定、自己で他者を代弁し、他者が自己を代弁するといふところに、一種の傲慢さを見ることはできないだろうか。懐疑的立場に立つと、「自己」は「他者」を真に理解し、代弁することが可能なのか、そしてその逆はどうか、という問いを発したくなるであろう。（筆者自身がそ

の立場にあるという意味では決してないことを断わっておく）

つまり自己と他者の交換、すり替えはそう容易に行えるものなのだろうか、という素朴な疑問がある。これを肯定的に評価するか否定的に評価するかで、ラスタに対する評価全体も異なってくるはずである。

また自己を他者で代弁する、代弁させられるということは、「自我」抜きの一人のラスタとしての集合的自己が、他者（のラスタ）に代弁されうることである。その場合の「他者」も結局は、「自我」抜きの集合的自己としての他者ということになるはずである。

ではその場合、他者が自己に代弁されることは何を意味するのであろうか。逆の場合に自己否定につながることを示唆したと同様、ここでは他者否定につながるであろうか。筆者の見解では、やはり部分的に他者否定はなされている。代弁行為、その思考過程のなかに、「個人的」解釈がある程度は含まれているはずなのに、彼らには一種のテーマ理論、理想、理念を先行させる思考パターンがある。「自己」はあるべき他者像をあるべき自己像と重ね合わせ（同一化とまでは言わないにしろ）、「他者」を他者としている傾向は見逃せない。それが先述の「傲慢」と紙一重の差で表裏となっているようである。

自己と他者の認識(3)

自己表現と否定されてきた自己

ではどういう形で、本当の意味で自己や他者を認識し、理解し、それらを言語に表現するのであろうか。ただしあまり言語表現、形態に細部までこだわると、言語さえも使えなくなってしまう状況も出てくるかもしれない。また一つのユニークな発話形態として定着させ、別の形で文法体系まで変えていくことさえあり得るかもしれない。とにかく言語表現一つをとってみても、今後の展開を観察する他はないが、興味の尽きないものがある。

ところでこの代弁行為ないし巧妙なスイッチングでは、「自我」は抹殺されてしまうのであろうか。そしてそのようなことは可能なのであろうか。現実の発話行為の場、リーズニングの場などにおいては、厳密な区別が瞬時になされることはほとんど不可能であろう。つまり部分的「自我」が混入した自己が、解釈、発話表現といった一連の知的作業の中で顔を出していると解釈した方がよいであろう。

以上触れた「I」の多用の理由について、これまでは過酷な奴隷制時代から常に自己を否定されて生きて来ざるを得なかった、そのうっ積された怨念を晴らすかのように噴出した、反動的

エネルギーの一表現ではないかという、一種心理学的説明がなされてきた。それは筆者にもうなづけるものではある。奴隷制廃止以降も結局、黒人層の大部分はすべての面で劣悪な環境の下に置かれ、自己主張が許され、その通りになる余地はあまりなかったと言っているからである。このような継続的抑圧状態の中でやつとつかめた黒人、アフリカ人の子孫としての誇り、ガーヴェイの預言の成就としての待望のメシア、セラシエの戴冠、ようやく黒人の神を神とできる喜び……。これらの希望と確信に満ちたアイデンティティがラスタファリズムにおいて形成されたと言える。彼らの言語パターンは、それに基づいた自己主張と解釈されうるのである。

広がるラスタファリズム(1)

―国内で―

ラスタファリズムは以前若干触れたとおり、黒人下層階級のみならず中産階級にもジ・ワ・ジ・ワと浸透し、また上層階級の一部からもドレッドロックスになった者が出るなど、今や階層・階級構造論の視点からのみでは説明不可能になっている。つまり社会の上下関係における線や面の境を超え、縦のつながりが出てきたのである。

またこの運動は、黒人性を前面に出

し、強調し、黒人の人種・民族的復権運動と銘打って呼ばれる程、黒人中心主義的ではある。しかし近年見られる現象の一つは、他の少数派のエスニック・グループ（ジャマイカでは中国系やインド系など）にも確実にアピールし、エスニック・バウンダリーをも超えつつあることである。

先の社会階級差にこだわらないこともそうだが、このエスニシティ *ethnicity* の点においても、既成の概念や常識、狭義の保守性に傾きがちな「大人」社会とその通念に抗議し、「新しい秩序」や生活様式、「ユニークなカリビアン・アイデンティティ」の模索と推進において、多感で純真な若い世代が「何か」を始めてきた。この点は重要である。

ラスタファリ運動の場合、そこには被抑圧者としてのアイデンティティという主観的共通性がある。また抑圧からの解放を推進する者としての同情心、共感、そして賛同がある。それ程強く、深いコミットメントが要求されるわけではない。ただ、ラスタの持つ内容と表現様式の多様性、特にレゲエというスポーツクスマンを持っていることに対して惹かれる者はきわめて多いのである。既成のものに飽き足らない、しかし「アイデンティティ・クライシス」(cf. エリクソン)を経験している者にとって、ラスタファリズムは確かに選択肢の一つとなっている。

彼らは無論、ラスタになることがいかに非難、批判を浴び、社会の落伍者、犯罪者等々の汚名を着せられ、白眼視、追放、暴力といった迫害の対象になることは十分知っているはずである。それらをも考慮に入れ、彼らのなり方は各人各様とも言える。ラスタの主義・主張、ライフ・スタイル等の部分的導入、そして自己に合うように変形して「ラスタ」を誇る者たちは確実に増えている。そして当然、彼らのラスタファリズム論や解釈はそれだけ、多様性の枠を拡張することになるのである。

広がるラスタファリズム(2)

— 国外へ

ラスタファリズムの国外への広がりについては今夏実態調査をするので、ここでは若干触れる程度にする。

受容された社会、また社会内の場所にもよるが、彼らは相異性よりも共通性を強調し、むしろ「同一性」をうたう傾向がある。彼らは相互に情報交換や交流を図り、相互に励まし合い、教え合うという強化、教育にも力を入れようとしている。しかし実際はラスタを入国不許可者の対象としている国ないし社会（非独立地域）も少なくない。また国際的機関紙のような出版物も発禁の憂き目に会っている。

その主な理由にはまず、(1)非合法麻

薬との密接な関係、(2)それらに関連する犯罪増加の防止、また(3)大多数が名目上のキリスト教徒である社会にとつての「邪悪な異教」、「にせキリスト教」の流布の防止、そして(4)彼らの政治的ラディカリズムないしアナキスト的分離主義的立場がもたらすクーデター等の政府転覆の意図の疑惑が挙げられよう。

例えばセント・ヴィンセント（正式名称 St. Vincent the Grenadines）では、付属するグレナディン諸島の一つユニオン島(Union Island)と、ラスタを首謀とする「反乱」(一九七九年十二月)があった。中央政府（首都はセント・ヴィンセント島のキングスタウン) Kingstown の行政に抗議しての一時的「反逆」ではあったが、概してラスタは体制に反対、拒否し分離するものと把握された。「彼らのイデオロギーの中には「国家の中の国家」(state within the state) 建設という政治性も含まれていることが少なくない」またトリニダードの場合、インド系が全人口の約半数近くを占め、黒人系とは経済をはじめ生活の諸側面で様々なレベルの競合関係や確執が続いているという面がある。黒人系はインド系との比較対立の過程の中で、物の見方などにも関わってくる文化的側面も絡み、結局「アフリカ的なもの」にある程度固執してきた。底辺層の黒人はそ

の「アフリカ的なもの」の一つとしてラスタファリズムを解釈し、参入していく傾向が近年見られる。

ラスタファリズムのジャマイカ国外での受容、発展は、やはり新大陸のデ・アスボラ *de Asibora* 黒人／アフリカ人としてのアイデンティティを模索する動きと大きく関わってきた。しかしジャマイカの特異な歴史的コンテクストの中から誕生し発展した運動が、他の社会に伝播し、受容され根付いた場合、どのような特徴ある展開を見せ、変化するであろうか。これらの課題は、同様の土着主義的運動ないし宗教、千年王国運動などとの比較研究をする上でも参考になり、いくつかの新しい問題提起は可能であると思われる。

ラスタファリ運動は、他の事例に漏れず非合理的で社会問題化され易い側面を多分に持つが、当分は消滅するどころか、むしろ形を変えながら、さらに多様化しつつ進展してゆくだろう、というのが筆者の現在の感想であり、展望である。

ここには重要な二つの要素、雄弁さ *eloquence* と演技パフォーマンス *performance* のうまさの伝統が生きていると見ることができる。

雄弁性については、ガーヴェイも小さい時から訓練をしたことが知られているが、流暢に説得力ある話ができることは威信と力に結びついているので

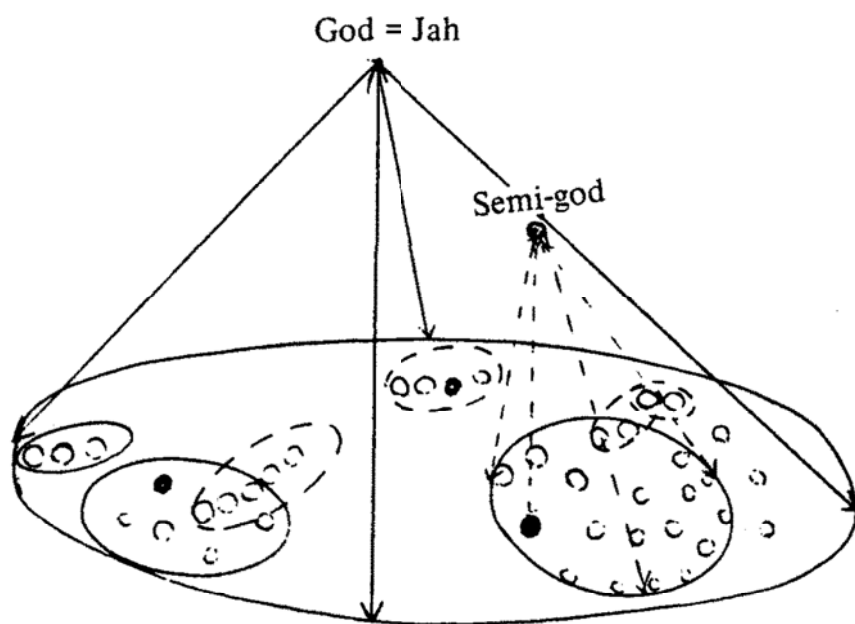
ある。つまり人々にアピールする人物というの、不言実行型よりは、まず雄弁さにおいて秀れたものを持つとされているところがある。アフロ・カリビアン・フォークロアの最近の研究でも指摘されているが、「言葉の人」(Man of Words)としての伝統的特徴がある (J. R. D. Abrahams 一九八三年)。ラスタのリーズニングの場合、無論その内容、特に知識量と質(信憑性)は問題にされるが、それよりも流暢に説得力ある話し方ができる者が結局はリードしている。

淀みなく口をついて出てくる様、言葉の連続性、流れに、筆者は口をはさむのに苦勞し、またいかに忍耐が要求されるかを思い知った程である。

そしてパフォーマンスの重要性。それは音と身体運動・技法とことばを使ったコミュニケーションと深く結びついて切り離せないものである。

以上、簡単ではあるが、ラスタファリ運動の多様性について、いかに多様であるか等の側面を含めて若干の考察を試みた。これは今後同運動の展開を観て考えてゆくための一段階に過ぎなく、多様性の全面を対象にしたわけではない。ここではまず多様化してきたという事実を重視し、今後その方向を辿るであろうことを予測し、我々の見方、視点をも多様化、多面化しなければならぬことを提言したい。

The Rastafarian Groups and Their God: A Rough Vertical Sketch



- ... A leader or his equivalent
- ... An individual Rastafarian
- ... A rigid association
- ... A loose association

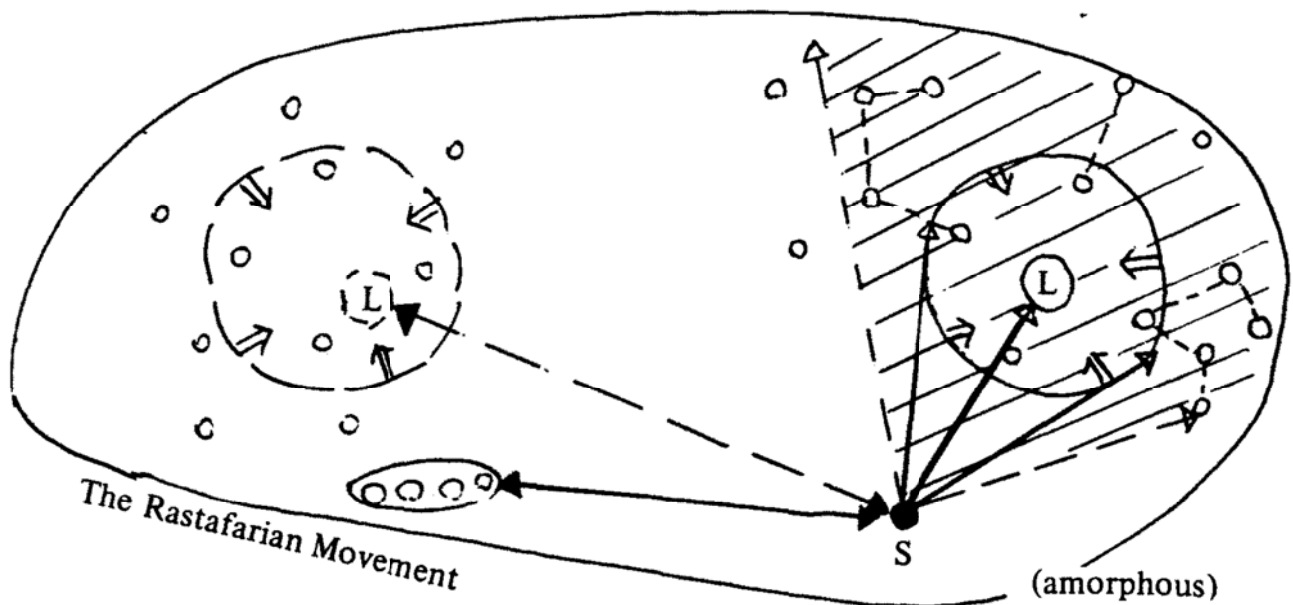
△資料1▽
神、リーダー、フォロアーとの関係及びグループニング。(グループの重複部分は個人の複数のアフィリエーション・Nationを示し、それはグループのバウンダリーの柔軟性に結びつく。)
(拙著「一九八四年」二八ページ)

N.B. The more powerful the vertical communication between brethren as individuals and as a group and their God, the more intensified the horizontal sense of oneness prevails.

<資料 2>

影響力のネットワーク。(影響力の強さやあり方、内容も多様だが、相互関係、フィードバックは見られる。これこそ運動の存在基盤であり、推進力と言えるのである。)
(前掲書、30 ページの図)

A Network of a Rastafarian's Influence:
A Prototypical Example

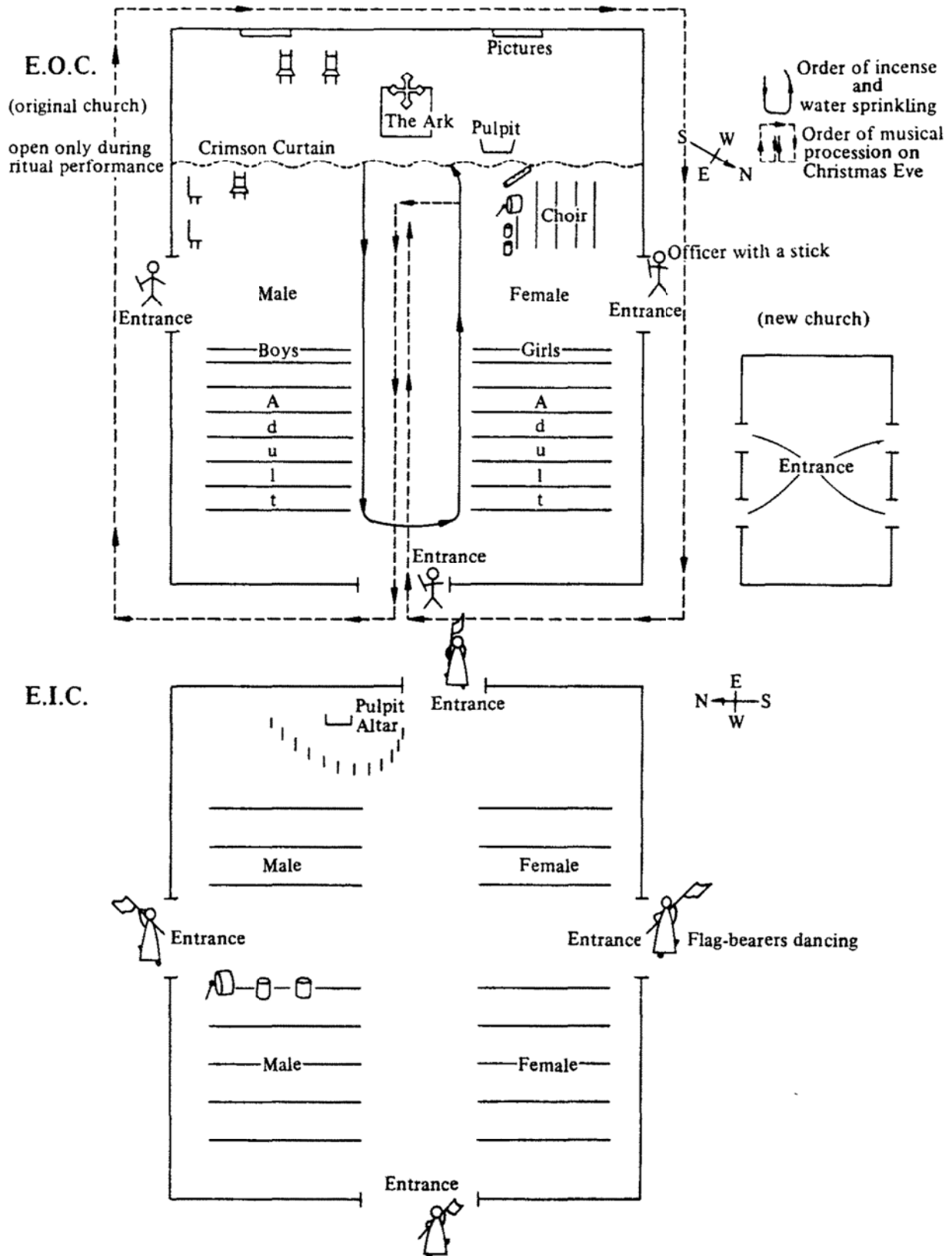


- S ... A leading figure who is to influence
(centralise or organise) the whole movement
- ... An individual
- Ⓛ ... A leader or his equivalent
- ○
○ ... A group with its hangers-on
- ⇒ ... A centripetal force (convergence)
- ... Connection
- ... Strong influence
- - - → ... Weak influence
- ↔ ... Strong opposing relationship
- ↔ ... Weak opposing relationship
- /// ... A sphere of Ⓛ's influence

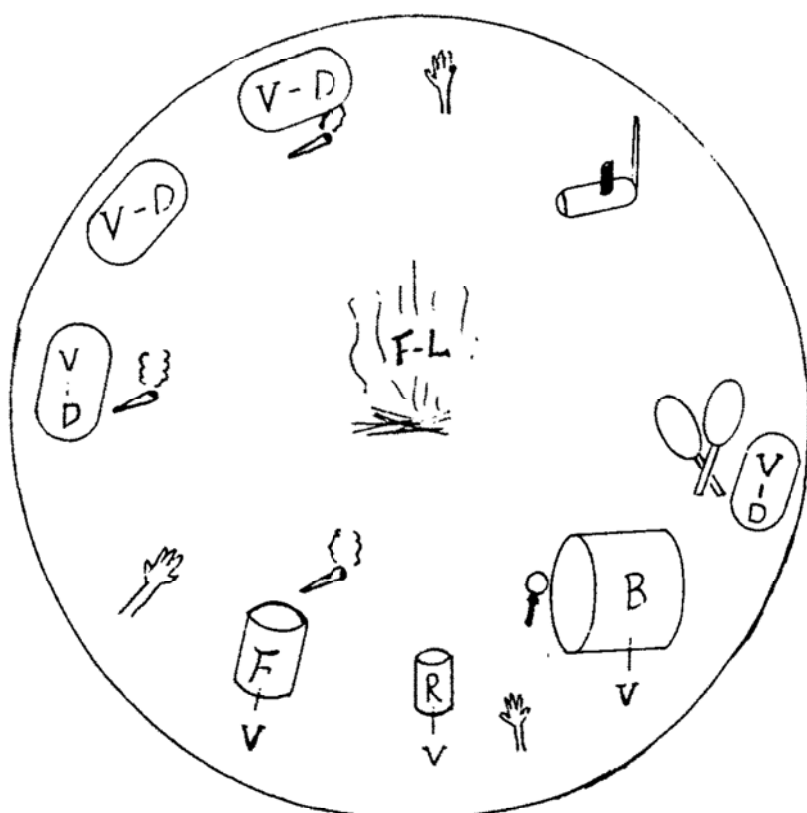
<資料 3>

儀礼所内の構造, エチオピア正統教会と
P.エマニュエルのコミュニーの対比。
(前掲書 119 ページ)

Basic Internal Structure of the Church/"Tabernacle"
(The Ethiopian Orthodox Church and The Ethiopian International Congress)



Basic Elements for Nyabyinghi Musical Performance



(V-D) ... Voice (chanting) and dance

(F) ... Fundeh drum

(R) ... Repeater drum

(B) ... Bass drum

(Maraca/shakka) ... Maraca/shakka or any percussive instrument

(F-L) ... Fire or light

(Ganja) ... Ganja

(Clapping) ... Clapping

△資料4▽
カジュアルなナイヤビンギ儀礼の基本的要素―原型図。夜行われることが多いので火、光は重要。キリスト教的の世界観をも反映し、暗闇(ノン・ラスト)に対する「世の光」と自称。「火」も聖書で言及される公義の神の出ず、焼き尽くす

火のイメージが含まれている。光に関連する「霊」「稲妻」もラストの象徴的言語。三種のベース、フンデ、リピーターは最も演奏が困難。フンデのリズムは、セラシエ及び人間全体の心臓音の象徴で、生命の律動を表わす。一般に女性はドラムに接触してはならないと主張する者は多

い。フンデのリズムに合わせ手拍子を打つことが多いし、参加自由。歌(讚美)も参加自由。歌詞は讚美歌をラストの境界観とアイタル言語で置換したもの。ハモニーある合唱は奨励される。音楽に合わせて身体をゆする動きが一般的。ガンジャも不可欠。パイプでなくてもタバ

コ、葉巻き状のものをくわえる。回しのみもする。

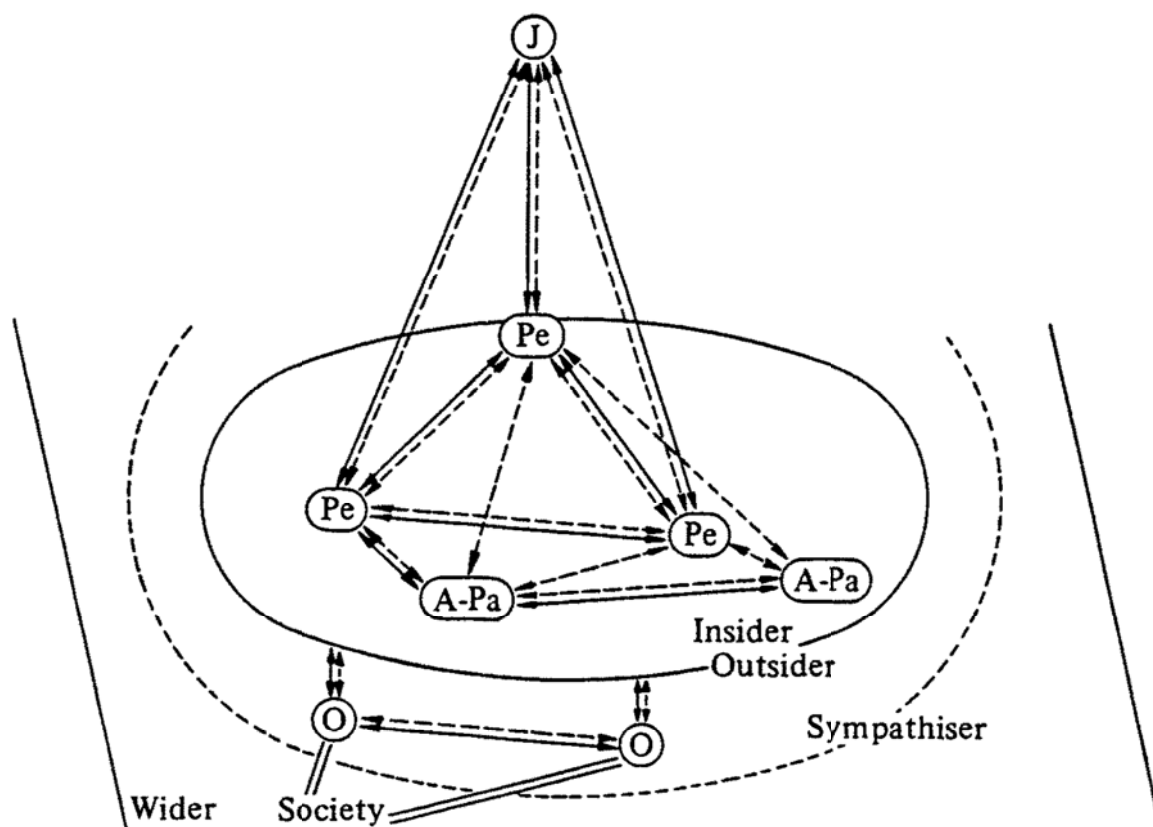
(前掲書二二五ページ)

<資料 5>

ナイヤビンギ儀礼時の基本的コミュニケーションの流れ。
相互性、互酬的原理が見られる神ジャー Jah は超越者であると同時に（自己の）内在者でもある。このような直接・間接のコミュニケーションがあつてはじめてナイヤビンギとしての意義が出るのである。

（前掲書，132 ページ）

A Model of Basic Communication Flows during a Nyabyngi Performance



- J Jah
 Pe Performer
 A-Pa Audience-Participant
 O Onlooker
 ——— Direct Interaction/Communication
 - - - Indirect Interaction/Communication

<資料6>

ラスト独自の名前——個人名及びグループ名。自己構成、アイデンティティの核ともなる名前の変え方(つけ方)、その役割。これらの通称で知られる者と、親譲りの名で通る者、両方知られている者等様々である。グループや組織によっては、エチオピア正統教会のように、アムハラ語の洗礼名を持つ場合、十二氏族では生まれた月によって十二氏族名が決定されて呼称とされる場合など、多様である。音楽家の場合のみならず、グループ名にもユニークなものが多い。

(前掲書, 205~207 ページ)

Samples of Rastafarian Names

[Common Phenomena]

- I. Attached as a Prefix "Ras", "Jah"
 "Bongo" ("I")
 "Bredda" (Brother)
 "Sista" (Sister)

(Peculiar to a certain group)

- The Ethiopian International Congress
 "Priest", "Priestess"
 "Prophet", "Prophetess"
 The Ethiopian Orthodox Church
 "Kes" (= "Priest" in Amharic)

- II. Attached as a Suffix "I"

A. Some Non-Musicians

["Ras" plus a Symbol-Identification]

1. Biblical

- Ras Daniel Heartman, Ras Menelik,
 Ras Micael (variation, "Ikell"),
 Ras Peter de Rock, Ras Boanerges,
 Ras Zion, Ras Fire,
 Ras Gabre (= Gabriel) Selassie ...

2. Social

- Ras Historian, Ras de Judge,
 Ras I (Eye)-Sight, I Ras I, Ras Dizzy (I)...

["Jah" plus a Symbol-Identification]

- Jah Lloyd, Jah Guide, Jah Lion,
 Jah Negus, I Jah-man, ...

[Amharisation (Baptised Name)]

- Ras Kebe, Ras Ibuna,
 Kes Amaha Selassie, Kes Estefanos (= Stephen)
 Kes Palus Selassie (= Paul)
 Tekle Haimanot (= Plant of God, the Father)
 Wolde Semayat (= Son of Heaven)
 Wolde Sematat (= Son of Martyrs)
 Wolde Dawitt (= Son of David)
 Tesfa Michael
 Tesfa Selassie Hamilton

(Female)

- Askale Mariam (= Fruit of Virgin Mary)
 Atsedie Maryam (= Garden of Mary)
 Ehite Mariam (= Sister of Mary)
 Ethiopia (= Our Country)
 Wolete Miwot (= Daughter of Life (Eve))
 Wolete Tekle Haimanot (= Daughter of Plant of Faith)

[Bongo plus a Symbol-Identification]

- Bongo Purro, Bongo Georgie,
 Bongo Hue (or "U")...

B. Some Non-Musical Groups

- Church (of) Triumph
 Ethiopian International Congress...
 Ethiopian Orthodox Church
 Ethiopian Zion Coptic Church
 House of Elders
 House of Dread
 I.N.R.I. (I, Negus, Rule, Israel)
 Issembly (Assembly) of Elders
 Judah Coptics
 Movement of Jah People
 Organisation of Rasta Unity
 Rastafari(an) Movement Association
 Rastafari(an) Theocratic(-cy) Government
 Twelve Tribes of Israel

N.B. These groups sometimes overlap because of inner splits or new groupings. They may not, in addition, be necessarily identified as "Rastafarians" either by others or even by themselves. Here the type of names and symbols is concerned.

C. Some Musicians (including DJs) and Musical Groups

1. Individual

- Augustus Pablo, Big Youth, Bingi Bunny, Burning Spear,
 Burning Wailer, Dr. Alimantado, Fred Locks, Ibo,
 I-Jahman Levi, I-Kong, Jah Lion, Jah Stone, Kiddus-I,
 King Tubby, Pablo Moses, Prince Buster, Prince Far I,
 Prince Jazzbo, Ranking Dread, Ras Michael, Ras Midas,
 Scorcher, Skully, Spanner, Tappa Zukie, Trinity, Zap Pow, ...

2. Groups

- Abyssinians, Aggrovators, Archangels, Black Uhuru, Brimstone,
 Chosen Few, Congoes, Culture, Dragonaires, Ethiopians,
 Gladiator, Inner Circle, Israel Vibration, I-Three, Knowledge,
 Light of Saba, Meditations, Mighty Diamonds,
 Mystic Revelation of Rastafari, Pioneers, Prophets, Revolutionaries,
 Samaritans, Slickers, Sons of Jah, Sons of Negus, Soul Syndicate,
 Sound and Power, Third World, Tradition, Upsetters, Wailers,
 Word, ...

R- words

Rasta, race, radical, rational, (raid), rebirth,
 realise / realisation, reason / reasoning, reap, recognise / recognition,
 recompense / recompensation, reconcile, recover, recreate, red,
 redeem / redemption, regeneration, reincarnation, rejoice, religion,
 repatriation, represent / representative / representation, rest,
 resurrection, reveal / revelation, revolution, revision (of the Bible),
 (reactionary),
 right / righteous / righteousness, ritual,
 road, rod (of correction), root (of David), royal, Rome / Roman (Catholic),
 rule

() 内は否定的な意味で使用される

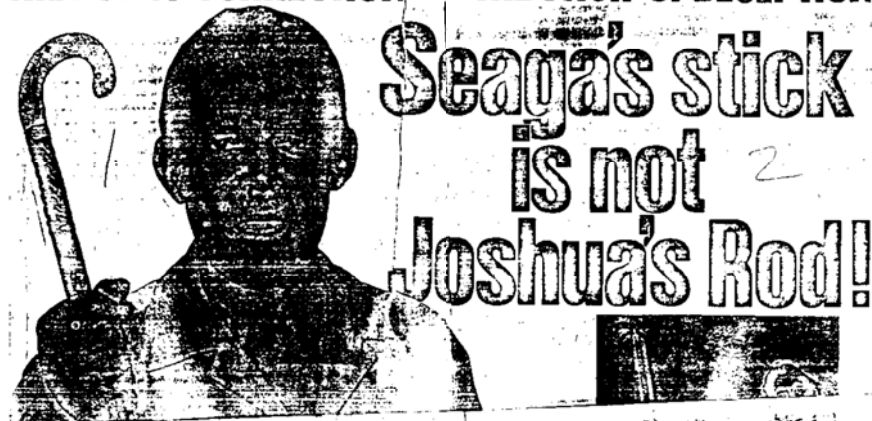
[] 内は頻繁に使用されるフレーズ例

△資料7▽
 愛好されないし重要な概念の連想を喚起する、Rで始まる
 単語（これだけの重要単語が全部、Rを頭文字にするという偶
 然が興味深い。彼らはリーズニングの間にもよく言葉遊びのよう
 なこともするが、歌詞にも、またDJ（ディスクジョッキー）やDJか
 ら歌手などに移った者たちのその才能のすばらしさには驚かされる。
 軽妙な talk-sing 調のものがヒットしているゆえんである。

Sanjay Ganesan, February 27, 1982

PAGE FIFTEEN

THE ROD OF CORRECTION VS. THE STICK OF DECEPTION



Seaga's stick is not Joshua's Rod!



Seaga's stick is a childish trick

It is the type of stick that is commonly used in Jamaica by people who cannot help themselves. The "Rod" is made of carved African Ebony, with an Ivory Handle and an Ivory Tip. It has metal claps at the handle and tip.

Jamaicans will not be fooled again by the senseless and Deceitful political trickery of Desperate Politicians.

THE PNP WARNED YOU. THE PNP TOLD YOU.
 MORE LIES ARE YET TO COME. BEWARE!

It's time for a change now!

Better must come

VOTE PNP

△資料8▽

72年総選挙のキャンペーンで、いかに聖書的／キリスト教的アレゴリーが使われたか。
 (デイリー・グリーナー紙より)

(注1) 彼らの呼称は様々ある。Ras Tafari cult, Ras Tafariism, Rastafarism, Rastafarianism, Rastafarian Movement, Ras Tafari Movement, Rastas, Rastafarians, Rastafari 等が主なものである。特別な正式名称は定まっていな。

(注2) 例えば「いつからラスタになったか」という質問をしようものなら、「ラスタにはなるものでなく、生まれてこの方ずっとラスタなのだ、いや生まれる前からラスタなのだ、つまりラスタとして生まれているのだ」等々の返答が、様々な表現を通し、あるいは「教義」の個人的解釈として、とうとうと説教調で語られるのである。

(注3) しかし現実にはそのような学校を作っても、政府につぶされてしまう。結局は一般の学校へ通わざるを得ない。しかしある所ではラスタゆえ教師、生徒より排斥・いじめの対象とさえなることもある。

(注4) 正書法があるわけではない。Nyabingi, Nyabingi, Nyabingi, Nyabingi 等がある。略してビンギ (byngi, bingi 等)、稀にナイヤとも呼ばれる。またニヤビンギと呼ぶ人もいる。

(注5) PNP (Peoples' National Party) は72年、76年総選挙で勝利を収め、党首マイケル・マンレイ (Michael Manley) が首相として国を治めた。しかし後半はキューバ、ソ連寄りの社会

主義に傾斜しすぎ、経済的混乱をも引き起こした。80年総選挙では、JLP (Jamaica Labour Party) が地滑り的大勝利をし、党首エドワード・シアガ (Edward Seaga) が現在に至るまで国を牛耳っている。彼の立場は米国寄りで、民主主義を唱道しはするものの、現在内部批判は強い。

(注6) これについても、特定の学術用語は定まっておらず、各研究者が自由に表現してきた。例えば「I-tal language(s)」、「I-tal words」、「I-words」、「Rastalogue」、「Dread talk」等があり、新造語である。

(注7) これも正字法、正書法が定まっているわけではない。I-and-I から始まり、「I-an-I, I-an-I, I-n-I, I-oo」とある。ジャマイカのクリオール英語では、話された、ないし聞かれるとおり(に酷似した)音をアルファベット文字で表す傾向がある。

参考文献

- 拙稿 一九八一年(a)「80年ジャマイカ選挙を見て——経済悪化と社会主義政権の終焉」『アジア経済』22巻8号
——一九八一年(b)「ラスタファリアンの讃美歌——ジャマイカ・ラスタファリ運動のナイヤビンギ音楽(1)『史境』(歴史人類学会) 3巻
同右 一九八二年(a)「ラスタファリアンの讃美歌」(2)『史境』4巻

——一九八二年(b)同右(3)『史境』5巻

——一九八四年(a) Rastafarian Music in Contemporary Jamaica (副題少略) 東大外大A研

——一九八四年(b)「ジャマイカの土着バプテスト教会——奴隷制社会における黒人のアイデンティティとキリスト教をめぐって」『アジア経済』25巻12号

質疑応答

Q ラスタは一体何人位いるのか?
五来 一九七三年で7万人。

Q ジャマイカの全人口は? ラスタの人口比は?

長嶋 最近の統計では約二百十万人。ラスタについては、人数を云々するのが極めて困難である。ラスタ人口も実に様々。10万人(共感者等も含めて)と言う人もいるし、全人口の60%はいると多目に見る人もいる。しかし「真のラスタ」はもっと少数、と主張する人もいる。これは定義の問題と深く関わってくる。これまでセンサス(国勢調査)などでは、ラスタファリアンという個別の項目はなく、「その他」の中に入っているとみなされてきた。しかしそこで出てくる数字よりはずっと多い。ラスタには政府関係のものとノ

ータッチ、つまりセンサス等にも参加しなかったところがある。それでのような数字のゲームは、彼らにとっても我々にとっても、往々にして当てにならず、また苦笑の対象になる。

Q そうするとコミュニティの中に入っている人、組織の中の人はい多いのか?

長嶋 中に入っている人も多い。ある面で見ると、ほとんど何らかの組織名ないしグループの名を挙げることがある。

Q コミュニティの中の人と外の人とは半々位か?

長嶋 外に在る人の方が多い。

Q コミュニティは小さいのか?

長嶋 先にスライドで見たボボ(P. エマニエルのグループのラスタ)たちのコミュニティ自体はそれ程広くない。そこで見た生活者は60人位。彼らに人数を尋ねると「無限」とか「星数位」と答えたり、「二、三百人と答えたり……」。またメンバーも結構入れ替わりがあったりして、長期間滞っていた人の方が珍らしい。

ハウエルのコミュニティは、かつての名残りをとどめない程、訪問時(一九八〇年六月)には閑散とし、数える程のメンバーがいたのみであった。

Q ジャマイカの言語は何か？

長嶋 パトワと呼ばれる非常に訛りの強い英語が母体のクリオール。英語が公用語。

Q キリスト教との関係は？

長嶋 一緒にされたら困る、というのが両者の言い分。双方忌避し、異教、邪教、悪魔扱いをしてきた面が強い。大学のキリスト教徒の中には非常にラスタに理解や同情心を示す者はいる。ラスタの主張、見解に一理あり、とカリブ独自の歴史、そしてキリスト教史との関わりより必然的に生まれた点を深く理解している。このような理解者は今後増えると思われる。

しかし一般的に正統派のキリスト教から見ると、例えばセラシエを神とするといった場合完全に異教になる。ただ非常に興味深いことに、確か一九八〇年代初頭に英国で、ラスタの広がり、その影響力を恐れてか(？)、キリスト教界より、彼らをキリスト教の一部とみなすという見解を出した、と日本の新聞(毎日新聞)が特派員報告シリーズの一部として報道していた。もしそうだとすると、英国のものはジャマイカのものとは違った側面を持つことになり、それは意味深長である。それともラスタ鎮静化のための手段か「誤り」だったのであらうかとさえ思うこともある。

Q アフリカには様々な人種がいるが、エチオピア皇帝を奉っているというところは、東アフリカのセム系と人種的にジャマイカ人はつながっているのか？

それとも観念的なものか？

五来 ジャマイカ黒人はほとんどニグロ系で、例えば西アフリカのイボ族とかの出身である。それでセラシエ帝を見た瞬間、これは違うと思った人間もいたようである。ただアフリカの王様だったら誰でもよかった。彼らの頭の中ではアフリカとエチオピアというのは分かれていなく、エチオピア＝アフリカのような考えを持っている。象徴的にエチオピアという名を使っているのだと思う。

大島 聖書に言及されているエチオピアを自分たちの故郷と考えている。たまたまエチオピア皇帝が神とされた。それはセムであろうとハムであろうと、一つの国民ではないというところである。空港にハイレ・セラシエが来た時も、大変な失望が出てきて騙されたという考え方をした人もいたし、仕方が無いと考えた人もいた。

またエチオピアに行つて帰ってきて、また夢の中のものと現実の中のものをつなげたという、その矛盾の中で、常に試行錯誤をしていくというもののようである。

長嶋 ただアフリカ帰還リパトリエ

ーションにしても、実際にエチオピア(他の国ではなく)に帰らねばならないと信じている人も多くいる。十二氏族という比較的新しいグループ、ここには中産階級の子弟が多いのだが、彼らは毎月積立て金を集め、リパトリエーションの資金作りにあてると、という具体的行動をとっている。これまでも実際に何人かの有志を送って住んできた経緯もある。

実はエチオピアから帰国したばかりのメンバーと懇意になり色々な話を聞いた。彼の話では、エチオピアは想像を絶するもので、アジス・アベバから離れた何もない土地に住んでいた。肥沃な土地ではあった。しかし観光ビザ以外に入国する手段はなく、そのビザの問題でアジス・アベバで入獄させられてしまった。帰国後も、実際の体験を他のメンバーに話すことも許されない状況にあると恐れを抱いていた。というのは単に失望させるだけでなく、信仰の基盤をさえ揺るがすような「現実」の話を信じてもらえないだろうし、嘘だということと殺されかねない、とぼそぼそ話をしてくれたが、他のメンバーに自分の名前を言わないでくれと懇願された。ラスタを止めるのかと尋ねたら、わからないけどしばらくはよく考えてみたいと告白した。ロックスは切り、カルチャー・ショックの大きさにうちひしがれていた。失業者で、

ジャマイカではなく海外移民の道を模索中であつた。

Q スライドで見ると白い服装をしている人達が多いようだが、エチオピアのものを真似したりして文化的に何かつながりはあるのか？

長嶋 特にエチオピアの伝統と直接結びついているわけではない。キリスト教(文化)の伝統でも白が純粹の象徴であるという概念がある。アフリカの部族宗教や文化の中にも白にまつわる様々な概念や象徴体系はある。ラスタファリズム以外にも、他のアフロ・ジャマイカ宗教文化複合の中でも、白は重要な意味を持ち、白いものを着用することは多く見られる。

Q エチオピア正統教会は古いもので直接結びついているのか？

長嶋 そのもの自体は古い歴史を持っているのではなく、ジャマイカでは新しく移入されたものである。近年になって宣教活動を盛んに行うようになり、ジャマイカ以外にもニューヨーク、トリニダード、ガイアナ等に支部を置いている。ジャマイカへは政府よりの依頼もあった。ジャマイカ以外での活動状況はまだよくわからない。

Q それはラスタファリ運動が起こつて、それと対応して出てきたものか？

長嶋 エチオピア正統教会自体は、エチオピアのコプト教の流れの中から、一種の改革したような形で生まれた、比較的新しいもの。ジャマイカで派生したのではなく、70年からジャマイカ版が出来たもの。

五来 エチオピアのアビシニア教会は続いていて、それが派生したのが正統教会だと思う。

長嶋 英国の国教会アングリカンと女王との関係に、エチオピアの正統教会と皇帝の関係はよく似ていた。

Q 「アイ・アンド・アイ」の話で、「I」が多く出てくるということだが、パプア・ニューギニアではそれとは違う、一つのインテグレーションが見られる。そこでは新しいものを生むために、非常に複雑な英語の文法を単純化する。例えばパプア・ニューギニアのビジンの聖書を見ても、非常に多くの「I」が使われている。全ての動詞が「I」になる。たとえば「あなたが昨日行った」というのは「You yesterday I go」となり、過去、現在、人称を問わない形で「I」を使っている。一つの言葉の合理化がある。こういうビジンの場合とクリオールの場合、英語や仏語等の影響はあるが、このようなインテグレーションとは関係ないのか？

長嶋 このラスタ言語は全く新しい

現象と解釈した方がよいと考えている。
Q つまりラスタファリだけでやっているということなのか？

長嶋 その通りで、かえって anti-chroic (反クレオール) の面がある。

Q 先程英語を使っているのかどうかを聞きたかったのも、その「I」が多いということがどのような意味を持つかということと関わっているが、本当に「I」はよく使われている。アジアでもそのような現象は見られるようだ。「I」という形で多く使われるのか？

長嶋 その通りで、目的格も所有格も使われず主格で代用される。

Q ビジンで多い「I」というものに似た意味づけをしているのか？

長嶋 彼ら自身の中でそういう意味づけをしてきたか等について、まだ研究が進んでいないのでそこまで詳しくは言われていない。ただ研究者がわずかに発表してきたものの中では、そうではないだろうと言われている。とにかく研究発表されても未刊行のままというものも含めて、今後の調査研究が待たれる。

Q 「アイ」(E)と発音するのか？

資料には[h]音がカッコに入っていたりするが。

長嶋 一般的にジャマイカン・パト

ワでは、母音で始まる単語を発音する時[h]音が付くことが多い。例えば「アイ」は「ハイ」に聞こえたりする。その逆にHが頭文字の単語を発音する時[h]音は落ちる傾向がある。ただ「コー」の場合、[h]音はほとんど聞こえない。

Q 先程アイデンティティの問題と関連させてこの言葉について話されたが、アフリカン・コミュニケーションとかセン・オブ・コミュニケーションみたいなものと「コー」との関連が発生する以前の前提として、個人のアイデンティティとしての自己主張の問題がやはり強いのではないかと想像するのだが。

長嶋 確かにあると思う。

Q むしろ英国を媒介にしていたら、その方が強くなるはずと思われるが。

長嶋 確かにそのような面は忘れてはならないと思う。彼らもコミュニケーションとか原初のコミュニケーションに近い理想や理念を言っておきながら、一方で非常にインディヴィジュアリスティックなので、それらの相関関係から出てきた可能性が強い。

Q 日本とジャマイカとの関係だが、私の会社の子会社がコーヒー農園を経営して、ブルーマウンテンと関わっている。また友好国との看板をつけた車を出している。知人が2年前位からカ

リブ海担当の仕事になり、本などで向こうのことを理解したところだが、日本もかなりジャマイカと関わりがあるのかと思った。我々からするとブルーマウンテン位しか知らないが、他の産業はどうなのか？

五来 NECが技術協力で行っている。あとUCCがメーンで、三井物産も来ていたが、他はあまりない。「三井物産の人の話では、ホテルぐるみの泥棒がいたということである。」

Q 産業基盤は？

五来 ボーキサイトが埋蔵量で世界一だが、あまり掘るあてがないようだ。

長嶋 ボーキサイトの場合、国有化が進み、経営面でうまくいかなかったことがあった。現在のシアーガ政権は社会主義と反対の方向を向き米国寄りになったが、結局政権交代の度に、商社などは振り回されてきた。JICA関係者の話だと、公式ないし半公式の形で入国して協力しているも、経営面は政権交代時に引継ぎ等が全くできない状態で、ほとんど没にされてしまった経験は何度かしている。つまり協力関係の継続性の維持が困難である。直接現地に入っているもコミュニケーションがうまくいかない。日本製品は、車をはじめあらゆる所に見える形で非常に溢れている印象を与える。しかしほとんどの場合、輸入

品が一方的に存在していながら、人、スタッフがいらない。

Q 日本人は何人いるのか？

長嶋 滞在当時（78年10月～80年7月）、大使館の方を含めて10人未満だった。

Q 東西の接点としての南北問題というようなことはないのか？

長嶋 私の滞在時は、まさにジャマイカがキューバ化するというので大変な激動期であった。超大国から様々なルートを通して移入される人や物品がまた物議をかもし出し、騒然としていたことが多かった。米国からガンビは飛んで来る、大金がいつの間にか入っている、あるいはソ連からキューバを通して大勢のスタッフが入国し横柄で傲慢な態度で市民の怒りを買う……。それはすごかった。

Q それをうまく具合に操作して懐柔するところまでいったのか？

長嶋 経済的には緊迫した状態が続き、また悪化の一途を辿っていたと市民は考えていた。構造的に常に抑え込まれていて、なかなか危機的状态から抜け出せない仕組みになっている。IMFの借款問題にでもリスケジューリング rescheduling が困難な程の経済的問題があった。そのような面で、ま

さに東西緊張と南北問題の縮図を見ることが出来る典型例の一つと考えられる。

Q ラスタという所があるが、あれは何語か？ アラビア語ではないか？

というのは、ペルシャ湾沿岸にラスタムーラとかラスタ何とかというのが多くある。それでアラビアのような感じがするのだが。

長嶋 ラスタファライのラスタというのはラス・タファリ Ras Tafari を一度 Rasfali と一緒にし、それを簡略化してラスタ Rasta としている。「ラス」はエチオピアの王族の称号。

Q これは英語なのか？

長嶋 いえ、エチオピアのアムハラ語なので、アラビアよりの影響を若干受けているのかもしれない。

Q ではアラビア系なのか？

大島 セムとかハムとか関係はあるのだろう。

Q ラスタファリとは固有名詞か？

長嶋 ラス・タファリが即位してハイレ・セラシエと改名した。ラスは敬称。

大島 固有名詞の中に敬称が入っていると考えるとよい。

Q 公爵、伯爵などと同じようなもの

か。ラスがついている場合でも、王位を継承しない者はいるのか。

長嶋 そういうことになる。

Q 「ジャー」というのは何か？ 神か？

五来 エホバのことで、最高神。生まれ代わってハイレ・セラシエの姿形をとった。

Q ジャマイカの世界教会会議 WCC の総会参加者を知っているが、またモラヴィア派 Moravian の人もそうだが、非常に能弁である。世界各国からの人の前で堂々と話す様は大変個性的であった。そこには何かジャマイカ人独自のもの、力といったものがあるのだろうか。

長嶋 確かにヨーロッパ列強が入れ変わりに来島し、海賊をはじめ実に様々な人が来て入り混じってきた歴史がある。そういった多様な人種・民族・文化が錯綜してきた所なので、そこから国民性やパーソナリティで面白さが出てきた土壌を見ることができると考えている。

Q その他にもアメリカやラテン・アメリカやアフリカなどからの通路になってきたという面があると思うが。

長嶋 その通りで、地中海地域とも比較されることがある。そのように様

々な側面で様々な意味を持つ地域がカリブ海であり、多くの他との接点になってきたのである。

（文責 長嶋 佳子）

